

海外の日本語教育機関で活動する日本人教師の役割

日本語の使用環境から孤立した地域での活動環境整備のあり方を見直すために

宇津木晶

1. 修士論文の構成

第1章 研究の背景と目的

第2章 先行研究

第3章 研究方法

第4章 調査結果と考察

第5章 総合考察

主要参考文献

2. 「第1章 研究の背景と目的」の概要

第1章では、筆者が、日本語教師の中でも「海外における日本人教師」にこだわって、この研究に着手するまでに至った動機と、本研究の目的について述べている。

筆者自身が「海外における日本人教師」としてロシアで活動した3年間の経験の中から、「日本人教師は何のためにこの地で活動しているのか」という疑問が生まれた。しかし、残念ながら、その疑問に対しては赴任期間中に明確な答えを見つけることはできなかった。3年間の様々な出来事を思い出し、その都度自身の活動姿勢を振り返ることで何らかの経験則を得られていることは感じられる。だが、そうした経験則を漠然とした形のままで放置しておくのではなく、研究という形できちんと整理することが、再び自らが海外の日本語教育の現場へ復帰する際の活動指針となると考え、本研究に着手することを決意したのである。

筆者自身の経験から展開した研究で、日本語教育政策や教育活動に大きな影響を与えるつもりは無い。しかし本研究では、学習者たちと日々直に接している教師たちが、教師としての生々しい生き様を通して見た日本人教師像の一端を明らかにしていく。そこから、これから海外で活躍する日本人教師たちに「海外という現場のイメージを作る手掛かりとしてもらうこと」「困難に直面して試行錯誤しているときに、何らかの新しい気付きを得てもらうこと」というメッセージを伝えることが本研究の目的であると捉えている。

3. 「第2章 先行研究」の概要

第2章では、先行研究について以下の分類で概観し、本研究に関連する部分を中心にそれぞれの研究で明らかにされていることを参考として挙げる。そこでは、本研究の目的に沿った提言を検証し、本研究において明らかにされる結論を導き出すための手がかりを得ると同時に、先行研究と本研究の追究の差異を浮かび上がらせることで、本研究の目的や研究手法がより明確になると考えている。

(1) 海外における日本語環境

本研究では「海外」を活動の場とする日本人教師について論じていくが、「海外」の定義付けを行うにあたって、先行研究で取りあげられている「海外」の持つ概念と環境を岩井・岩澤(2004)、福島・イヴァノヴァ(2006)から検証する。

(2) ロシアにおける日本人教師の役割

本研究における調査対象地域は、筆者の海外における日本語教育活動拠点であったロシア・ノヴォシビルスクとなる。このため、「ロシア」という地域に着目し、その地域における日本語学習観とロシア人教師や教育機関が持つ日本人教師への視線を、今村(1994)、木谷(1998)、ストロゴワ(1995)、リスネンコ(1996)などから検証する。

(3) 海外において求められる日本人教師像

ここでは、「海外」「求められる日本人教師」という、本研究で追究しようとする内容に最も類似している点に着目した。具体的には、日本人教師が海外の日本語教育活動現場で求められる要素とその根拠を解明し、その結果をさらに教師養成への提言へと展開させた伊勢田他(1997)、佐久間(1999)、平畑(2007)、平畑(2008)などを取りあげ、そのうえで本研究の目的との相違について検証する。

(4) 海外の教育機関における教育活動とリソース活用

海外の日本語教育現場で日本人教師が活動していくにあたって、どのような理念を基に学習環境を整え、活動を展開させていくのかを検証し、そこに必要とされる日本人教師の姿勢について論じた研究を概観する。ここでは、実際のリソース活用事例について取りあげた先行研究から、活動を形成していく教師たちの理念を田中(1993)、トムソン木下(1997)、トムソン木下、舛見蘇(1999)などから検証する。

以上の4項目を基に、本章の最後で先行研究によって明らかになった点を整理しながら、本研究において解明しなければならない日本人教師の役割を論じていく視点を定める。

4. 「第3章 研究方法」の概要

第3章では、まず、本研究で重要なキーワードとなる「日本語の使用環境から孤立した地域」および「海外の日本語教育機関」についての定義付けを行う。どちらもそれぞれの地域事情によりその形態は様々であり、「海外」という一言で簡単に括れるものではない。従って、「日本語の使用環境から孤立した地域」というキーワードの定義付けにより、本研究での調査対象地域であるロシア・ノヴォシビルスクが、「日本語の使用環境から孤立した地域」に該当し、調査対象として妥当であることを述べる。それと同時に、「海外の日本語教育機関」というキーワードの定義付けにより、本研究における日本人教師の置かれている環境を明確にすることで研究対象を絞り、研究が散漫になることを防ぐ。

次に、海外の教育機関から日本人教師が求められる理由を、日本人教師の持つ「母語話者」「教師」としての能力の側面と、海外の日本語教育活動の現場における外国語教育政策の側面から論じる。それにより、海外の日本語教育現場が日本人教師を要求するに至る根拠を探る。外国語教育政策については、調査対象地域であるロシア・ノヴォシビルスクを念頭に、ロシア連邦教育・科学省作成の外国語教育に関する資料について「外国語母語話者教師の必要性」という視点で概観する。

そのうえで、本研究で採用する調査手法、データ分析手法について述べる。

本研究では、学習者たちと接している教師の生の視点から日本人教師像の一端を明らかにすることで研究目的に到達したいと考えている。そのためには、実際に「日本人教師」として、あるいは「日本人教師の同僚教師」として、様々な日本語教育活動を経験している人間の目を通した語りを得ることで、最も鮮明に海外で活動する日本人教師像を見出すことが可能であると考えている。そうした観点から本研究で採用しているライフストーリー的調査手法についての概念と具体的な方法、およびデータの分析方法について解説を行う。

本章の最後では、調査対象地域であるロシア・ノヴォシビルスクについて日本語教育の視点における紹介と本研究における調査対象地域としての選択根拠について述べると共に、インタビュー調査に協力してくださった調査対象者の選定基準と選定根拠を述べ、調査対象者と調査者である筆者との関係についても簡単に触れる。

5. 「第4章 調査結果と考察」の概要

第4章では、調査対象者として選定された、A教師・B教師・C教師の3名の教師のインタビューデータを記述していく。ここでは、3名の教師ひとりひとりの語りを紹介しながら、それらの語りの中で海外において活動する日本人教師にどのような姿を見出し、どのような期待を抱いているのかを明らかにする。本研究では、海外の現場で活動する日本人教師の役割に焦点を当てて論じていくため、日本人教師そのものの立場に立っている日本人教師側の意識と、日本人教師を受け入れ共に活動していくロシア人教師側の意識に分け、それぞれの視点で分析することとした。

進め方としては、まずインタビューデータとして取りあげた「語り」部分を抽出した視点を述べた後、実際に各教師の語りについて調査者であるインタビュアー、調査対象者であるインタビュー어의やりとりの部分を【語り】と表記して記述する。そして、〈解釈〉として該当するインタビューデータに対する解釈を記述し、各教師の考察へとつなげている。

本章では、各教師のインタビューから、以下の考察概要が得られた。

A教師 : 総語り数 45

(考察概要) 日本人教師としての能力と目的を持った活動が不可欠であると考えており、そのためには海外を活動の場とする日本人教師としての立ち位置固めと同僚や現地教育機関への自己発信の重要性を感じている。日本人教師自身の異文化理解に基づく視点の変容も重要であると考えている。

B教師 : 総語り数 45

(考察概要) 日本語教育活動を支える同僚教師や教育機関関係者といった協力者たちとの関係構築も重要な鍵となり、そうした協力者たちとの関係を継続させていくことの重要性も教師は認識しなければならない。それに伴い、個人的事情に配慮しながらも、教師という職業面を優先した協力の必要性を訴えている。また、B教師にとって日本人教師の存在は日本語能力向上や日本語使用において自信を持たせるといった「教師を励ます」存在となっている。

C教師 : 総語り数 28

(考察概要) 日本での研修や日本人教師との共同作業による様々な経験を通じて、大学時代に培われた教育観に縛られない柔軟な思考の習慣も獲得していった。また、日本人教師もロシア人教師も互いに保持する能力を開示し合うことで補い合う存在であると認識している。また、日本人教師は、既存の関係や複雑な人間関係に囚われない外部の人間であるという視点からも語られており、「調整機能」「気づきを促す」存在であると考えている。

6. 「第5章 総合考察」の概要

第5章では、第4章で得られた3名の教師の考察から、以下の考察を導き出し、「海外の日本語教育機関で活動する日本人教師の役割」と位置付けている。

(1) 日本人教師の役割と存在意義

①日本人教師の自己発信の必要性

日本人教師の活動方針を海外の現場で発信する。これは、日本人教師が海外の現場で自身の立ち位置を固め、存在する意義を主張し、そこで果たすべき役割を明示させるために必要不可欠である。

②日本人教師自体が動機である

日本人教師そのものの存在が、学習者だけでなく現地人教師にとって「励まし」「刺激を与える」存在となり、日本語教育を維持強化していく動機となる。

③日本語教育の枠を超えた存在

日本人教師は外部の人間であるという第三者的立場に位置している点を 利用し、「関係者間の調整役としての存在になること」と「外部の人間が持つ異なった価値観・教育観による気付きを促す存在になること」が可能となる。

(2) 日本人教師自身を見つめ直す視点

①日本人教師の育んできた教育理念を乗り越える

日本人教師が従来育んできた教育理念を捨てるということではなく、海外の現場の視点で自己の教育理念を観察し、改めて自己発信してみる機会を設けることが必要である。

②妥協への模索

「物事の異なるものを知り、異なるものの視点で受け止め、異なるものの 構成を理解する」ことを「妥協」と捉え、日本人教師が活動する海外の現場と自己の教育理念との異なるものを直視し、その異なるものの視点で自己の教育理念を再考するために思考を変容させることが必要である。

7. 主要参考文献

ここでは修士論文概要書で触れた参考文献についてのみ掲載している。

伊勢田涼子、佐久間勝彦、松岡弘、山田泉、田中幸子、小林基起（1997）「海外で教える日本人日本語教師養成についての基礎的研究」『平成8年度科学研究費補助金（国際学術研究）研究成果報告書』、pp.1-59

- 今村和宏 (1994) 「厳しい環境の中で効果を上げる満足感を味わう 極東ロシア ウラジオ
ストク 日本語教育事情」『月刊日本語』1994年8月号、pp.24-31、アルク
- 岩井誠二、岩澤和宏 (2004) 「ハンガリー人日本語学習者のビリーフス」『国際交流基金日本
語国際センター紀要』第14号、pp.123-140
- 木谷直之 (1998) 「極東ロシアの大学生の言語学習観について」『国際交流基金日本語国際セ
ンター紀要』第8号、pp.95-109
- 佐久間勝彦 (1999) 「海外で教える日本人日本語教師をめぐる現状と課題」『世界の日本語教
育<日本語教育事情報告編>』第5号、pp.79-107、国際交流基金日本語国際センター
- エレナ・ストロゴワ (1995) 「ロシアにおける日本語教育の問題点をめぐって」『ICU日
本語教育研究センター紀要』5、pp.95-101、国際基督教大学 日本語教育研究センター
- 田中望 (1993) 「教師の役割の新たな広がり」『日本語学』3月号、pp.7-12、明治書院
- トムソン木下千尋 (1997) 「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『日本語教育論集 世
界の日本語教育』第7号、pp.17-29、国際交流基金日本語国際センター
- トムソン木下千尋、舛見蘇弘美 (1999) 「海外における日本語教育活動に参加する日本人協
力者」『日本語教育論集 世界の日本語教育』第9号、pp.15-27、国際交流基金日本語国
際センター
- 平畑奈美 (2007) 「海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質」『早稲田大学日本語教
育研究』第10号、pp.31-44、早稲田大学大学院日本語教育研究科
- 平畑奈美 (2008) 「アジアにおける母語話者日本語教師の新たな役割」『日本語教育論集 世
界の日本語教育』第18号、pp.1-19、国際交流基金日本語国際センター
- 福島青史、イヴァノヴァ・マリーナ (2006) 「孤立環境における日本語教育の社会文脈化の
試み」『国際交流基金日本語教育紀要』第2号、pp.49-64、国際交流基金日本語国際セ
ンター
- リュドミラ・リスネンコ (1996) 「ロシアの外国語教育の現状」『世界の日本語教育<日本語
教育事情報告編>』第4号、pp.85-92、国際交流基金日本語国際センター
- Министерство образования и науки Российской Федерации (2007) . “Об изучении редких
иностранных языков в системе общего образования”

以上